

理論と論理：論文賞受賞にあたって

服部 雅史

この度、拙著論文「推論と判断の等確率性仮説：思考の対称性とその適応的意味」(Vol. 15, No. 3, pp. 408-427)が論文賞を頂戴した。たいへん名誉なことである。以前に賞らしきものをもらったことがあるとすれば、おそらく小学生の頃だったろう。賞が作品の価値を決めるのか、作品が賞の価値を決めるのか、そんなことが妙に気になった青臭い頃は、幸か不幸か賞とは全く縁がなかった。そんなのは動的相互作用だとうそぶく程度の知恵がついた今は、素直に、ほんとうに嬉しい。

が、何か書けと言われると困ってしまう。こんな機会を与えて頂くのはありがたいが、いったい何を書いたらよいのか。もとより遅筆な上に、この論文にしても、何か1つのことを成し遂げたというより、むしろ新しい研究のための出発点に辿りついたという感覚の方が強い。胸を張って人に語れるようなことは何もない。でも、せっかくの機会なので、恥を忍んで、執筆の背景や論文に関して最近思っていることを少し書いてみることにしよう。

この論文の執筆は楽しかった。自分がほんとうに面白いと思う内容を没頭して書くことができた。その意味では、幸運に恵まれていた。自信作と言うのはあまりにもおこがましいが、書き上げたときに大きな充実感があったのは事実である。その上、自分が企画した特集の論文であり、しかもその特集は、成否の見当のつかない一風変わったテーマを掲げてしまったという不安の中、気負いもあったし、何とかせねばという焦りに近い感覚もあった。そのような状況で生まれた論文だっただけに、他人に認められたことは、個人的には感慨深いものがある。

この論文は、展望論文というカテゴリーに分類されている。これまでの関連研究(主に自分の研究)

を展望して、新たな視点から理論的枠組みを提案したもので、実際には、むしろ理論論文に近いと言える。しかし、『認知科学』には理論論文というカテゴリーがないし、また、「展望論文=有名な研究の網羅的で偏りのない解説」という誤解に対する反発もあったので、あえて展望論文として投稿した。

展望した研究は、決して一連の研究として実施されたものではない(だからこそ展望の意味があるとも言える)。しかし、すべての出発点は、Oaksford & Chater (1994)との出会いであった。私にとって、Wasonの4枚カード選択課題に関するこの論文の存在意義は大きい。この論文なくして、現在の私の研究はないと言っても過言ではない。とはいえ、出会った当初は、一面的な理解で満足していた。すなわち、提唱された「モデル」の鮮やかさしか認識していなかった。

Wason 選択課題は、認知心理学においては非常に有名な課題であるが、推論課題としては単純すぎると感じていた。そのため、それまで実はあまり大きな関心を向けていなかった。また、膨大な数の実験研究も、条件を少し変えただけの派生的研究が多いように感じて、あまり面白さを感じていなかった。そんな中、Oaksford & Chater (1994)の情報獲得モデルは、Shannonの情報理論を駆使し、それまで明確に認識されていなかった課題の二面性を見事に捉えたもので、推論研究の流れを大きく変える力を予感させるものであった。

しかし、この論文の本当の力は、Anderson (1990)の合理分析に基づく「理論」的な側面にある。それは、おそらく、Ward Edwards や Egon Brunswik にまで遡ることができる合理的人間観と重なるであろう。この点に気付くためには、他の著者を含む別のいくつかの論文を読む必要があったが、そうして次第に得た理論的側面の理解は、その後、非常に大

きな意味を持つことになった。自分の考えは、今は当然ながら Oaksford らと完全に同じではないが、そのような大域的観点の理解は、自分の研究アイデアの源泉として大きな財産となっている。

科学にとって、あるいは科学に携わる研究者にとって、最も大切なものは理論であろう。ところが、日本では理論の大切さがあまり認識されていないような気がする。あるいは、もっと正確には、理論を説得的にことばで語り尽くすことに精力を注ごうとする傾向が、西洋社会に比べて相対的に小さいように思われる。少なくとも、認知科学や心理学関係の日本の雑誌の中に、国際誌でよく見かける長大な理論論文を見つけることができないのは事実である。また、残念なことに、認知に関する重要な理論的概念を考えてみても、わが国発のものはあまり思い当たらない。これは、独創性の問題ではない。英語の論文を読むと、たったこれだけのことを言うために、よくこんなにもことばを尽くすものだ、感心を越えて驚嘆することがある。おそらくは、理論、そして論理に対する指向性の違いではないか。

確かに、実証性や客観性のためにデータやモデルは科学において重要であるが、理論のないデータは無意味であり、理論のないモデルはどんなにデータによくフィットしても面白くない。ときどき、モデルを理論と混同している人を見ると、「理論」の意味がよく理解されていないのではないかと思うことがある。モデルは理論の一解釈である。よって、理論はモデルを生むが、モデルは理論を生まない。理論はモデルとして具現化され、モデルはデータによる検証プロセスを通して改良される。その結果は、理論の精緻化と単純化の動機づけを提供する。面白い研究は、このような拡大再生産のループの中で生まれるように思われる。

佐伯 (1986) は、面白い研究には「メタ理論」が必要であると言った。ほとんど同じ概念を、戸田 (1986) は「スーパースキーマ」と表現した。理論には、おそらく様々な抽象度のレベルがある。最も低い方に位置するのが、個別の問題を説明するための理論であり、メタ理論なりスーパースキーマなり

は、かなり高い方に位置するものと思われる。厳密には、佐伯 (1986) と戸田 (1986) の概念にも少しレベルの違いがあり、両者の微妙な意見の相違には、その点も関係しているように思われる。

理論を最高レベルの抽象度まで蒸留していくと、おそらく価値観や人生観に近いものになっていくのではないだろうか。最初からそのような悟りの理論を持つことは望むべくもないが、日頃からできるだけ多くの理論を育むような心がけが重要であろう。そのためには、同時に、理論を語ることば (logos)、すなわち論理が必要になるだろう。

文献

- Anderson, J. R. (1990). *The adaptive character of thought*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Oaksford, M., & Chater, N. (1994). A rational analysis of the selection task as optimal data selection. *Psychological Review*, **101**, 608–631.
- 佐伯 胖 (1986). 『認知科学の方法』. 東京大学出版会.
- 戸田 正直 (1986). 補稿「認知科学の方法」について. 佐伯 胖, 『認知科学の方法』(pp. 219–233). 東京大学出版会.



服部 雅史 (正会員)

1964年生まれ。1996年北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士(文学)。1997年より立命館大学文学部。2003–2004年英国(ウェールズ)カーディフ大学心理学部客員研究員。現在、立命館大学文学部教授。推論、意思決定、問題解決などの高次認知機能の研究に従事。人間の思考・言語・コミュニケーションの適応的合理性に興味を持つ。日本心理学会(2007–編集委員)、日本基礎心理学会、Cognitive Science Society, Society for Judgment and Decision Making ほか会員。
hat@lt.ritsumei.ac.jp